

さつぽろ発展の礎を築いた

山鼻屯田兵

中央区でも最も古い歴史の一つ、『山鼻屯田兵』について紹介します。

昔の山鼻は、今の山鼻に幌西、曙、西などの地区を含む広い地域でした。その山鼻に旧仙台藩、津軽藩など東北地方の元士族二百四十戸、男女千百十四

人が屯田兵として移住したのは明治九年（一八七六年）のことです。五月二十九日には移住を完了し、前年の琴似に次ぐ二つ目の屯田兵村が開村しました。

当時の山鼻は、未開の原生



山鼻屯田兵の像が立っている山鼻日の出公園
(南29西11)

林に覆われ、アイヌ語で「ユクニクリ」（鹿林の意味）と言われたところ、たくさんの鹿が群れ遊び、住む人もごくわずかでした。

屯田兵村は、東西は今の西七丁目から西二〇丁目、南北は南三条から南三条あたりがその区域で、兵屋は石山道路（今の石山通）を挟んで、東側（南八条通）南二三条通の西八・九丁目と西側（南六条通）南二一条通の西一二・二三丁目）にそれぞれ百二十戸が建てられ、東屯田・西屯田と言われるようになりました。

屯田兵制度は、北海道開拓使の開拓次官黒田清隆くろだきよたかの建議により、北辺警備と北海道開拓を目的に明治六年（一八七三年）に設置が決定されたもので、毎日厳しい軍事訓練と農地の開墾耕作が続けられました。



山鼻兵村開設碑（山鼻公園・南14西10）

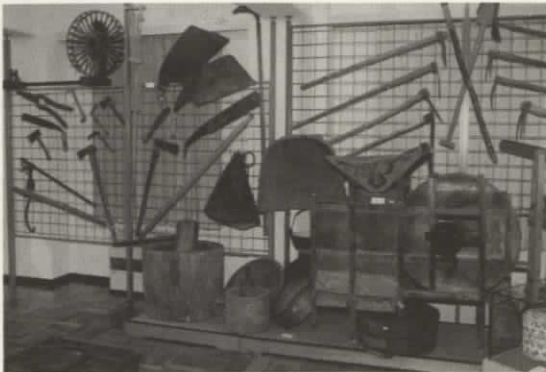
たが、西南の役や日清・日露の戦争にも参加し、札幌本府などの警備や非常時災害救助を行う徒歩憲兵でもありました。また兵村内の道路造成にも従事し、現在この地域で利用されている道路のほとんどを造りました。

農業などしたこともない人たちが、原生林を切り開くことから始めて、豊平川の洪水や鹿、害虫の被害に遭いながら開墾を進めていった苦労は想像を絶するものであ

つたに違いありませんが、その一端は山鼻記念会館資料室（南一四西九）などの展示物により知ることができ

ます。

屯田兵制度は、明治三十七年（一九〇



屯田兵が使用した農具など（山鼻記念会館資料室
-（財）山鼻記念碑保存資産運営-）

四年）九月八日の屯田兵条例の廃止によりその使命を終えましたが、兵役などの制約から解放された屯田兵のその後については、そのまま農業に従事した人や商工業者、役人になった人などさまざまで、山鼻を離れた人も少なくはありませんでした。

大正元年（一九二六年）に屯田兵やその子孫により設立された（財）山鼻記念碑保存資産では、毎年六月の最終日曜日に、山鼻兵村開村記念式典を行い、先人の苦労に感謝しているとのこと。

現在では、開村から百三十年以上が経っています。私たちも、今日の札幌の礎を築いた山鼻屯田兵の苦労とその功績を、今一度考えてみたいものです。

（平成六年二月号・第八回）



屯田兵大礼服（幹部のもの）
（山鼻記念会館所蔵）